

有限会社梶岡牧場

※2018年3月現在

代表者名	梶岡 春治	資本金	8百万円
設立年	1990年5月1日	売上高	74百万円(2017年2月期)
事業内容	生産(肉牛、野菜、堆肥)、 消費者直売、加工・製造、 観光・交流、飲食	経営規模	畑0.2ha、採草放牧地1.6ha、 生産施設10,000㎡、加工施設 20㎡(食肉加工)、直売所3㎡ (約30種類) 畜舎20,000㎡、 肥育牛330頭、その他(繁殖 牛30頭)
従事者数	9人(うち女性4人。女性内訳:役員2人、管理職1人、一般職1人)		
女性活躍 支援	<p>[女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援]</p> <p>産前産後休業、育児休業、看護休暇、短時間勤務制度等の措置、時間外労働及び深夜業の制限、育児・介護休業中の能力向上</p> <p>[女性に配慮して取組んだ環境整備]</p> <p>重労働等の業務改善</p>		



経営概況

有限会社梶岡牧場は梶岡春治氏を社長とする同族会社で、役員は春治氏の妻の暁美氏、長男の秀吉氏、長女の西山美貴氏。管理職には次女の兼綱紘美氏と、春治氏の実弟が就いている。一般職には管理栄養士である秀吉氏の妻の喜子氏、大学の農学部を卒業し2016年に就職した男性社員1名がいる。

肉用牛の肥育は、春治氏が1965年に50頭から始めた。4年後、地元食肉業者からの預託肥育を機に200頭に増やし、1975年からは牛ふん堆肥の製造販売も始める。1988年には、牧場の

敷地内にステーキやバーベキューのレストラン「FIRE HILL」を開店。レストランで提供する野菜の生産も行うようになった。

肉牛肥育の規模拡大は続き、2006年に2億円の補助事業で500頭の設備を整えた。しかし、預託肥育は社会情勢の影響などによるリスクを伴い、同社も何度か経営の危機をくぐり抜けてきたという。そこで、2014年から繁殖にも着手。現在30頭の繁殖牛を飼育し、子牛の生産からレストランでの提供まで自社で一貫してできる体制を築こうとしている。

営利事業とは別に、2001年に女性陣4名でNPO法人「きららの里」を立ち上げ、食育や農業体験、陶芸、染色などの体験プログラムを提供している。

2016年の売上高は7,376万円。品目の割合は堆肥が62%、肉牛が16%、レストランが20%などとなっている。

1. 経営者の理念・意識改革

経営理念には「自然を食す!」を掲げ、「一生懸命育てたものだから、きちんと扱い、きちんと



食し、きちんと命をいただく。それは、食材に対する礼儀」と銘じている。

同社の経営で特筆すべきなのは、質の高い堆肥の生産だ。「畑を牛ふんの捨て場にしない」という理念で、敷料には廃材などを一切使用せず、有用菌類を増やす発酵の過程を厳しく管理。山口大学と共同で、高密度な放線菌を含む堆肥の研究開発も行っている。

袋詰め商品の販売だけでなく農地への散布サービスも行いうほか、肥料設計ソフトを用いて農家へ施肥の提案も行い、地域の土壌改良に貢献している。この堆肥を使用したコメは「牧場米」と名づけてレストランで提供し、稲わらは牛の飼料として循環させている。

2. 女性の登用とキャリア形成

レストラン開業の大きなねらいのひとつが「女性の活躍の場づくり」だという。畜産の作業は力仕事が多い上、機械化により1人当たり200頭が人件費の採算ベースだという。そこで、女性が力仕事以上に能力を発揮できる「食、交流」の分野に挑戦することにした。レストランの業務は、店長の暁美氏を中心とした女性4人が当たり、提供する野菜の栽培も担うことにした。日常的に調理や食に携わる女性たちにとって、レストランの仕事は抵抗なく取り組めるもので、客との交流にも大きなやりがいを感じる職場となった。

この客との交流が、やがてNPOの設立につながる。レストラン開店10周年を迎えた年に、感謝イベントとして通年の体験教室を開いたところ、これが大好評を博した。実は美貴氏は陶芸、紘美氏は染色を大学で修めている。焼き物や草木染めなどの手工芸と、動物とのふれあい、畑の体験などの組み合わせが、都市民の心をつかんだのだろう。しかし体験教室は採算性が低く、同社の業務として続けることには無理があった。そこでNPOを設立し、助成金を得ながら体験交流や教

育の事業を続けることに。業務の割合は、梶岡牧場8に対しNPOが2で、ちょうどいいバランスだという。子育てを経験した女性たちの体験教育プログラムは高く評価され、地域の学校から出前授業の依頼を受けるなど、同社のブランドイメージアップにもつながっている。

3. 女性が働きやすい環境の整備

産前産後休業、育児休業の制度があり、美貴氏ら3人の女性が取得している。

一方、レストランの営業時間は開店からしばらくは11時～21時、休日は水曜のみで、野菜生産の遅れや、家族と過ごす時間が十分にとれないなどの問題もあった。そこで営業時間を17時までに短縮、定休日を月6日に増やしワークライフバランスの向上を図った。その結果、生活にゆとりができただけでなく、畑にも手が回るようになり年間100万円ほどの出荷さえできるようになったという。

時間の余裕ができたことは、キャリアアップにもつながっている。美貴氏が農業女子プロジェクトに参加するほか、女性農業次世代リーダー育成塾、6次産業化セミナー受講なども実現し、「牛1頭丸ごと食べようプロジェクト」の発案と実施など、新たな経営の切り口を生み出している。

審査委員の声

梶岡春治代表は果樹から牛の肥育に転換後、さまざまな困難を乗り越えながら、牛の預託肥育と高品質の堆肥販売、レストランで事業を拡大してきた。まだほぼ家族経営で、代表の妻がレストラン担当、長女が経理のほか食育、農業体験、陶芸などの体験プログラムを提供するNPOを担当など家族の女性の役割分担が明確で、うまく機能している。特に長女が出産・子育てを経験したことから、産前産後休業、育児休業などの制度整備にも目配りができている。